

【2020年度 学生交流委員会 事業報告】

学生交流委員会

委員長校 : 神戸親和女子大学

副委員長校: 甲南大学

委員校: 芦屋大学、関西国際大学、関西学院大学、聖和短期大学、甲南女子大学、神戸大学、
神戸海星女子学院大学、神戸学院大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸女学院大学、
神戸女子大学、神戸女子短期大学、神戸常盤大学、神戸常盤大学短期大学部、
頌栄短期大学、園田学園女子大学、園田学園女子大学短期大学部、姫路大学、
姫路獨協大学、兵庫県立大学
計22校

<目的>

学生交流委員会では、学生プロジェクト事業、学生災害ボランティア・ネットワーク事業の2つの事業により、コンソ加盟大学の学生に対して、他大学の学生との交流、自治体・企業など地域社会との交流、被災地との交流、社会人との交流等の場を提供することにより、参加した学生に様々な交流を促し、この経験が大学4年間の学生生活に資するよう、各種プログラムの内容の充実を図り、実施したいと考える。

<内容>

学生プロジェクト事業は子どもや保護者、他大学との交流事業として、「キッズフェスティバル」を実施する。学生災害ボランティア・ネットワーク事業は、阪神・淡路大震災を経験した地域として、学生が日常的な地域福祉や社会支援と災害時およびその後の災害支援とが連続性を持っていることを理解し、被災地での支援活動に取り組むことや復興支援の実情および今後の災害に備えた減災への取組みを学ぶことにより、日頃から主体性・自発性にボランティアや社会活動に取り組む姿勢を身につけ、被災地支援・復興支援や今後の災害に備えることを目的とする。また事業の実施体制として、ユニット制での実施を継続して実施する。上記2事業に基づく2ユニットのいずれかに全委員校が参加し、ユニットごとに企画立案から多くの加盟校が主体的に参画することにより、学生交流の実質化に繋げる。

<期待される効果>

学生交流委員会では、この2つの事業により、コンソ加盟大学の学生に対して、他大学の学生との交流、自治体・企業など地域社会との交流、被災地との交流の場を提供することができる。また参加した学生に様々な交流を促すことにより、学生自らが他大学の学生と協働し企画を実現することによる能力向上の機会を提供する。

	実施プログラム名称	予算額
①	学生プロジェクト事業「キッズフェスティバル」	800,000円
②	学生災害ボランティア・ネットワーク事業	2,600,000円

【2020年度 学生交流委員会 事業報告①】

課題	地域で活躍できる人材の育成			
達成目標	リーダー(企画・運営を担える人材)の育成:50名/年			
課題を解決する取組概要	<p>(取組1)地域(子どもやその保護者等)との交流を図るイベントを企画・運営し、異世代交流の体験を通じた幅広いコミュニケーション力、前に踏み出す力(アクション)、考え抜く力(シンキング)、チームで働く力(チームワーク)を、実践によって身につかせ、地域で活躍できる人材を育成する。</p> <p>参加学生には、地域の子どもの状況やその背景についても学ぶ機会を提供することにより、地域における子どもの現状(少子化等)と課題を踏まえた取り組みに繋げる。</p> <p>※「リーダー(企画・運営を担える人材)」 イベントの参加学生のうち、実行委員として当該イベントに関する企画、各種調整・交渉、運営等を担った学生。</p>			
活動指標	参加団体数:15団体程度/年 参加者(親子)数:500名/年			
実施内容(結果)	<p>・実施内容 学生プロジェクト事業は、「学生と子どものふれあいを通じた学生の交流」をコンセプトに据え、イベントの企画立案、イベントの運営等のマネジメントを行うことで、自ら考え行動する人材の育成及び企画力、創造力や運営力等学生が社会で求められる適応力を身につけることを目的として実施する。 「キッズフェスティバル」と題し、「子ども」をテーマにイベントを企画、運営する。具体的には、子どもたち(キッズ)を対象とした、「スポーツ」、「音楽」、「食」、「あそび」、「ものづくり」等の小テーマを設定し、各大学から学生の参加を募る。 学生リーダーの強化・充実に資するために、「リーダー養成のための講演」を2回程度予定していたが、コロナの影響で開催できず、オンデマンドによる講演に切り替えた。</p> <p>・具体的な進め方など コロナの影響で、例年どおりの進行ができなかった。8月に通常の募集はできないと判断し、まずは昨年度の参加団体にグループLINEで状況を説明し、参加を呼びかけたところ、10団体の参加希望が確認できた。 そこから、第1回の実行委員会を会場下見を兼ねてこべっこランドで開催。その後、Zoomによる実行委員会を3回行い本番に漕ぎ着けることができた。対面イベントは10団体のうち5団体が準備を進め、対面イベントが開催できないことに備え、全10団体が動画配信の準備を並行して進めた。 こべっこランドとも何度も打合せを行い、入場制限を午前・午後とも50名までとし、学生の会場参加も1団体5名にしほり、ブース定員を8名とし、開催時間も短縮して3密を避けての開催を実現することができた。 動画は、1年間 YouTube で配信する。 2回実施して来た大島剛教授(神戸親和女子大学)による「子どもたちのつきあい方」の講演は、代替案として、動画の講演を作成し、学生ほか関係者に1月15日(金)からYouTube で限定配信を行った。</p> <p>【結果】 2020年12月6日(日)に、こべっこランドで対面イベントを開催。 午前の部 10:00~11:00 午後の部 12:30~14:00 参加は、5大学5団体。 参加学生 35名(入替あり)。入場者数 子ども 52名、おとな 43名、計95名。 事故もなく、参加されたみなさんから高評価を受け、無事に終了することができた。</p> <p>動画も好評で、できるだけ多くの方々に観ていただけるよう広めて行きたい。</p>			
新しい試み等(事業計画に記載)				
事業収支	収入	支出	収支	備考
	800,000円	276,523円	523,477円	

自己評価	【対到達目標】	4	【対継続性】	4
	<p>こべっこランドでの開催が、5年目を迎えた。今年度はコロナ禍での準備・本番で、とても厳しかった。一時は中止も頭をよぎったが、これまで継続して来て途切れさせてはいけないとどうにか実施できないかと模索を続けた。例年どおりにはできないと判断し、縮小開催を想定して準備を進めた。5月には第1回の実行委員会を始めていたが、今年度は9月始まりとなり、短期間での準備に追われたが、参加団体の理解が得られ、学生たちの協力のお蔭で、想像以上にスムーズに進めることができた。</p> <p>対面ができないことも視野に入れて取り組んだ動画作成も、功を奏した。これは、学生たちが本当に良くがんばってくれた。YouTube で1年間配信を予定している。</p> <p>コロナ禍でありながら、こうしてスムーズな運営ができたのも、グループLINEの活用が大きい。連絡・意見交換、参加全団体間の周知徹底等、コミュニケーションツールとして非常に有効であった。連絡の徹底、書類提出の確認等も、スムーズに確実に行うことができた。</p> <p>例年であれば、500名から1,000名の親子等が参加されるフェスティバルだが、今年度は100名弱の参加でさびしいイベントにはなったが、このコロナ禍であっても前向きに取り組めたこと、様々な制限の中で無事に開催できたことの意義は計り知れない。学生たちにとってかけがえのない経験になったと思う。きっとこれからの人生に役立つものと確信している。</p>			
■自己評価基準(対到達目標)	4:当初計画を上回って達成 3:当初計画を達成 2:当初計画をやや下回った 1:当初計画を下回った	■自己評価基準(対継続性)	4:本プログラムは継続すべき 3:本プログラムは継続しても良い 2:本プログラムの継続には改善が必要 1:本プログラムは中止すべき	
理事会からの改善提案(次年度事業計画に反映)	<p>・新型コロナの影響で、会場のこべっこランドと調整し、制約条件(5ブース、午前午後各々で参加者最大50名)下で実施する一方動画を活用して10グループが参加した。コンソの基幹事業の一つとして来年度以降も継続していただきたい。</p>			

【2020年度 学生交流委員会 事業報告②】

課題	⑤地域の防災等を担う人材の育成－学生災害ボランティア・ネットワーク事業			
達成目標	「ひょうご災害・防災リーダー」認定学生数:50名(2021(平成33)年度までの延べ数)			
課題を解決する取組概要	<p>阪神・淡路大震災の経験を有する兵庫県で地域の防災等を担う人材養成プログラムを実施する。コンソ加盟大学の学生と県内外の各団体が連携し、阪神淡路大震災の経験、教訓を学ぶ場の提供や東日本大震災や岡山豪雨災害等の現場での実際の支援活動に取り組み、被災地の復興支援の体験やそこから派生する防災への取り組みを学び、自主的且つ自発的に活動に取り組む学生を育成するとともに、災害・防災リーダーを養成する。</p> <p>・阪神淡路大震災とその後の復興の過程に関する学びと実地的なボランティア研修を踏まえ、現場のニーズに即したボランティアを企画実施しうる能力を身につける。</p> <p>・宮城県名取市、岡山県倉敷市等でのボランティア活動により、時間経過に伴うニーズの変化や復興の過程を学ぶ。</p> <p>・震災直後やその後の復興の過程を学ぶとともに、今後の防災・減災に向けて何ができるのかを考え、実践に移すことができる「ひょうご災害・防災リーダー」を養成する。</p> <p>※「ひょうご災害・防災リーダー」 2年以上継続して活動に取り組み、リーダー研修の受講及び各グループ活動での実践的取組を最後まで遂行した学生。</p>			
活動指標	プログラム参加学生数:250名(年50名程度、2021年度までの延べ人数)			
実施内容(結果)	<p>今年度は当初予定では、4月に学生募集、5月～6月にかけて、オリエンテーション、各種研修、事前ヒアリング、7月に活動のまとめ、8月～9月に現地活動、最後に活動の振り返りを予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言を受け、事業計画を根本的に見直す必要が生じた。</p> <p>共催者である神戸市社会福祉協議会、日本財団学生ボランティアセンターとの定期的な協議をはじめ、宮城、岡山、熊本、長野との現地協力団体との打ち合わせもオンラインで進め、10月募集に向けて事業計画の再構築を進めた。</p> <p>一方、今年度の学生スタッフ8名については、6月後半からオンラインによる各種研修を開始するとともに、現地協力団体のひとつである宮城の尚綱学院大学からの提案により、先方の学生との協働により企画・立案し、運営も学生主体で行う「大学間連携オンライン合同ボランティア活動学習会2020」を8月29日、30日に開催するなど、一定の成果をあげることができた。</p> <p>上記のように学生スタッフの養成を行いながらも、事業開始に向けて、新型コロナウイルスの感染拡大防止を踏まえ、今年度の当事業のテーマを「コロナ禍でのボランティアのありかたを考える」と設定した。また募集学生数も40名から20名への変更、活動地も2箇所4箇所へと増加変更、研修やプログラムでのオンラインの活用、活動時の三密対策の徹底など各種対応を行う事を条件に委員会で承認を得、10月から学生募集を開始、そして11月の各種基礎研修を対面で実施・終了した。</p> <p>12月から現地関係者とのオンラインヒアリング等を踏まえ、2月から3月に、宮城、岡山、熊本、長野の4カ所で、現地関係者との連携の下、オンラインを活用した交流活動を展開することができた。詳細については、事業報告書・学生広報誌「学ボラ」にまとめる予定である。</p>			
新しい試み等(事業計画に記載)	<p>・新型コロナ影響の中、活動を後期に延期したが、支援地を従来の2拠点から4拠点と活動内容の拡充を図っている。</p> <p>・3月の現地活動の実現に期待する。コンソの基幹事業の一つとして、来年度もぜひ継続していただきたい。</p>			
事業収支	収入	支出	収支	備考
	2,400,000円	788,775円	1,611,225円	

自己評価	【対到達目標】	4	【対継続性】	4
	<p>コロナ禍になり、事業計画の変更が必要となり、共催団体との協議の下、学生募集時期の10月への変更、募集学生数の40名から20名への変更、またヒアリングや本活動でのオンラインの活用など新たな方策に転換することで11月から事業を開始することができた。</p> <p>また今年度は現地関係者との打ち合わせを重ねた結果、過去最大となる4カ所の活動地を設定することができた。</p> <p>「コロナ禍でのボランティアのあり方」を考えるをテーマに、各地で異なる状況を踏まえ、「新たな災害ボランティア」を兵庫の学生が考え、実践するという当事業の趣旨・目的を深度化するプログラムとして再構築できたことは意義がある。学生スタッフ8名、新規参加学生14名、共催団体教職員スタッフ14名が協働し、2月から3月の本活動、3月の振り返り会の開催により、参加学生に当事業の理解をさらに深め、「他人事を自分事として捉え、地域の課題解決に向けて取り組むことができる人材」の養成に繋げることができた。当初を上回る計画に転換できたことから次年度以降も継続が必要となるプログラムである。</p>			
■自己評価基準(対到達目標)	4:当初計画を上回って達成 3:当初計画を達成 2:当初計画をやや下回った 1:当初計画を下回った	■自己評価基準(対継続性)	4:本プログラムは継続すべき 3:本プログラムは継続しても良い 2:本プログラムの継続には改善が必要 1:本プログラムは中止すべき	
理事会からの改善提案(次年度事業計画に反映)	<p>・新型コロナ影響の中、活動を後期に延期したが、支援地を従来の2拠点から4拠点と活動内容の拡充を図っている。</p> <p>・3月の現地活動の実現に期待する。コンソの基幹事業の一つとして、来年度もぜひ継続していただきたい。</p>			